

企画展 ライトアップ木島櫻谷
— 四季連作大屏風と沁みる「生写し」

Spotlight

on

KONOSHIMA

Okoku



2024

03.16 (sat) - 05.12 (sun)

《展覧会概要》

大正中期に大阪茶臼山に建築された住友家本邸を飾った木島櫻谷の「四季連作屏風」を全点公開します。

大正期の櫻谷は、独特な色感の絵具を用い、顔料を厚く盛り上げ、筆跡を立体的に残し油彩画のような筆触に挑戦しています。そのために櫻谷は、“技巧派”などと称されましたが、櫻谷の真骨頂はそれに収まらない極めて近代的なものでした。リアルな人間的な感情を溶かし込んだ動物たちは絵の中で生き生きと輝きはじめ、とりわけ動物が折節にみせる豊かな表情は、観る者の心に沁みます。

江戸時代中期(18世紀)京都で生まれた円山四条派の代表的な画家たちによる花鳥画表現を併せて紹介することで、櫻谷の「生写し」表現の特質をライトアップします。



《基本情報》

展覧会名 企画展 ライトアップ木島櫻谷ー四季連作大屏風と沁みる「生写し」

会 期 2024年3月16日(土)～5月12日(日)

開館時間 11:00～18:00 ※金曜日は19:00まで開館 ※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日、4/30・5/7(火) (4/29、5/6は開館)

入 館 料 一般1,000円(800円)、高大生600円(500円)、中学生以下無料

※20名様以上の団体は()内の割引料金

※障がい者手帳等ご呈示の方はご本人および同伴者1名まで無料

会 場 泉屋博古館東京

〒106-0032 東京都港区六本木1-5-1

<https://sen-oku.or.jp/tokyo/>

TEL:050-5541-8600(ハローダイヤル)

主 催 公益財団法人泉屋博古館、毎日新聞社

《展示構成》（予定）

§ 1：四季連作屏風のパノラマ空間へ、ようこそ。

木島櫻谷が描いた四季連作の金地大屏風が全面居並ぶ空間を、まずをご用意しましたので、心ゆくまでご堪能ください。

四双の金屏風は、大正中期に大阪茶臼山に建築された住友家本邸のため、大正4年頃から2年をかけて制作されたものです。本紙だけでもすべて縦180cm・幅720cmをこえるサイズは、書院大座敷にあわせてかなり大振りです。琳派が流行した大正期、これらの屏風は制作中から「光琳風」との評判もたち、古典をこよなく愛した15代住友吉左衛門(春翠)の審美眼にかなうものでした。

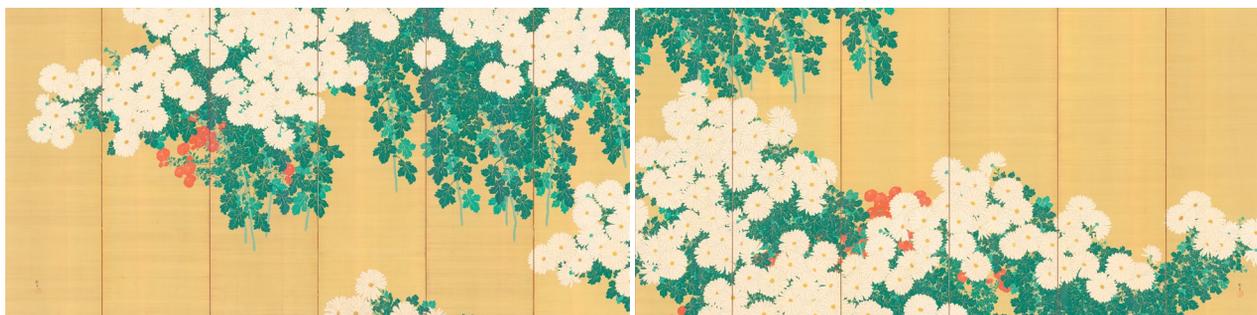
確かに、装飾性に富んだ型の反復美は琳派好みの典型を示してはいます。しかし、よく観ると油彩画も研究した絵具の扱いや、写生を生かし景物を大胆に切り取った狩野派的画面構成など、櫻谷の斬新で意欲的な取り組みが盛り込まれていることに気がきます。そして、一輪一輪描き分けられ、光を求めまた風雪にゆらぐ花々は、伸びやかでよどみない櫻谷の運筆によっていっそう輝きを増しているのです。



木島櫻谷《柳桜図》大正6年（1917）泉屋博古館東京



木島櫻谷《燕子花図》大正6年（1917）泉屋博古館東京



木島櫻谷《菊花図》大正6年（1917）泉屋博古館東京



木島櫻谷《雪中梅花》大正7年（1918）泉屋博古館東京

§2：先人「写生派」 絵師たちと櫻谷

江戸時代中期(18世紀)、多様な画派が活動していた京都において、円山応挙（1733～1795）は、中国画や西洋画の技法を取り入れつつ、自然や事物を生き生きとありのままに描く「生写し」(写生)という方法を編み出しました。実際に目の前の物を見ながら描くという「写生」は、当時において非常に斬新で、人々の目を奪うものでした。

その後、応挙が編み出した写生は門下の「円山派」 絵師たちによって継承され、また応挙の画風に学んだ呉春を祖とする「四条派」も派生。円山四条派の写生画風は京阪画壇を席捲して、近代にも大きな影響を与え、明治10年に京都に生まれた櫻谷も、応挙以来の写生表現に学びながら自らの画風を確立していきました。

ここでは円山四条派の写生に基づく親和的表現に特色がある動物画に焦点をあて、先人画家たちによる動物表現と比較しながら櫻谷の動物画をライトアップします。



円山応挙《双鯉図》
江戸・天明2年（1782）
泉屋博古館



森一鳳《猫蝙蝠図》
江戸時代・19世紀
泉屋博古館



木島櫻谷《月下遊狸》
大正時代 泉屋博古館東京



森徹山《檀鴨・竹狸図》
江戸時代・19世紀 泉屋博古館



(部分)

木島櫻谷《葡萄栗鼠》
大正時代 泉屋博古館東京



§ 3：櫻谷の動物たち、どこかヒューマンな。

外界の風景や事物を見たままの実感(リアリティー)と鮮やかな色彩感への欲求。これこそ、明治30年代以降の日本画に切実に求められていたものでした。櫻谷が京都画壇の中で次第に頭角をあらわすことになるのはまさにそうした時代でした。当時20歳代の櫻谷はその欲求に応えるかのように円山四条派の写生を基礎にした表現から、さらに突っ込んだ西洋画式の写実を様々に試みています。

そのために櫻谷は、「技巧派」とか、「最後の四条派」などと称されましたが、櫻谷の真骨頂は、それに収まらない斬新なものでした。古典画題に現代性を与え、時に人間的な感情をも動物たちに溶かし込んでいます。絵の中の動物たちは櫻谷の筆を通して息を吹き返し、生き生きとした豊かな表情が観る者の心に沁みます。ここでは、動物表現に託した櫻谷のヒューマニズムが生んだ作品をご紹介します。



木島櫻谷《獅子虎図屏風》
明治37年（1904）個人蔵



望月玉泉《芦雁図》
明治40年(1907) 泉屋博古館東京



木島櫻谷《秋野孤鹿》
大正7年(1918)頃
泉屋博古館東京



木島櫻谷《双鹿図》
明治30年代 個人蔵

《貸出可能画像・キャプション一覧》

※屏風片隻使用時は（右隻）（左隻）
部分図使用時は（部分）の表記をお願いします

展覧会担当：野地耕一郎（泉屋博古館東京 館長）

《お問い合わせ先》

泉屋博古館東京 広報担当：橋本旦子

TEL: 03-3584-8136 FAX: 03-3584-8137 E-mail : pr-tokyo@sen-oku.or.jp

プレス専用 広報用ダウンロードシステムのご案内

泉屋博古館東京では、オンラインでご利用いただける
広報用ダウンロードシステムをご用意しております。

下記のプレス専用ページにアクセスしていただくと、
広報用資料（プレスリリース、広報用画像、ご招待券
など）をお申込みいただけます。

※初回のみ新規ご登録が必要です。



プレス専用 広報用ダウンロードシステム URL

<https://www.artpr.jp/senoku-tokyo>

《QRコードからの読み取り》

右のQRコードを読み取り、ページにアクセスしてください ▶▶▶



年間スケジュール・個別展覧会開催概要のほか、当館の
施設画像（外観・内観）なども、「広報用データダウン
ロードシステム」よりご確認いただけます。

内覧会情報などもご案内申し上げます。

ご不明な点は、下記までお問い合わせください。



泉屋博古館東京 SEN-OKU
HAKUKOKAN
MUSEUM TOKYO

広報担当：橋本旦子 pr-tokyo@sen-oku.or.jp
TEL 03-3584-8136 FAX 03-3584-8137 <https://sen-oku.or.jp/tokyo/>



泉屋博古館東京

SEN-OKU HAKOKOKAN MUSEUM TOKYO